台湾侵攻２

着上陸侵攻

大石英司
Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画　安田忠幸

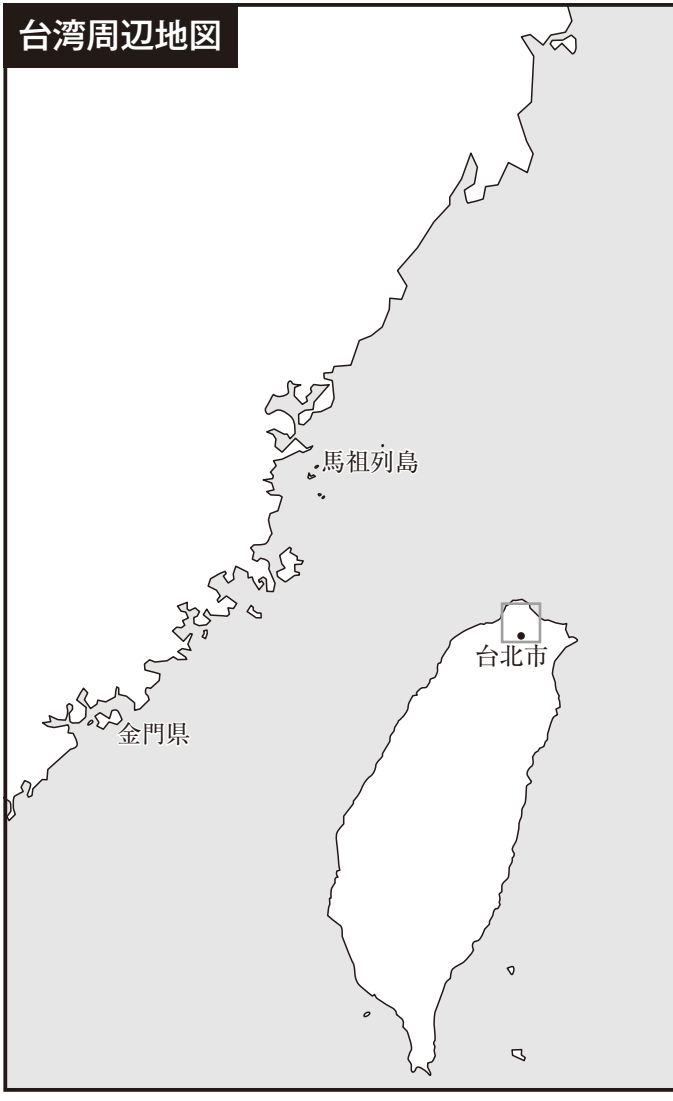
地図　平面惑星

目次

プロローグ　13
第一章　邦人退避　20
第二章　フェイク・ニュース　42
第三章　指揮統率　68
第四章　ネイバータッチ　92
第五章　せめぎ合い　118
第六章　ヴィーナス　142
第七章　キャンパス　165
第八章　メッシュ・ネットワーク　182
エピローグ　198

台北市北部
2
101
陽明山国立公園
淡江大学
2
淡水駅
淡
水
河
国防部
基
隆
河
旧松山空港
第164海軍陸戦兵旅団
台湾軍「鐵軍部隊」
2km
那覇市
与那国島
宮古島
石垣島
竹富島
50km

台湾周辺地図



登場人物紹介

日本

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平（どもんこうへい）　陸将補。水陸機動団長。

〈原田小隊〉

原田拓海（はらだたくみ）　一尉。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

畑友之（はたけともゆき）　曹長。小隊ナンバー２。コードネーム：ファーム。

高山健（たかやまけん）　一曹。分隊長。コードネーム：ヘルスケア。

大城雅彦（おおしろまさひこ）　一曹。コードネーム：キャッスル。

待田晴郎（まちだはるお）　一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

田口芯太（たぐちしんた）　二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

比嘉博実（ひがひろみ）　三曹。田口のスポッターを自称。コードネーム：ヤンバル。

吾妻大樹（あづまだいき）　三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〈姜小隊〉

姜彩夏（かんあやか）　三佐。元韓国人、韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。

漆原武富（うるしばらたけとみ）　曹長。司馬小隊ナンバー２。コードネーム：バレル。

福留弾（ふくとめだん）　一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

井伊翔（いいかける）　一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

水野智雄（みずのともお）　一曹。元オリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

西川新介（にしかわしんすけ）　二曹。もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

御堂走馬（みどうそうま）　二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

姉小路実篤（あねこうじさねあつ）　二曹。父親はロシア関係のビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

川西雅文（かわにしまさふみ）　三曹。元Ｊリーガー。コードネーム：キック。

由良慎司（ゆらしんじ）　三曹。西部普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

小田桐将（おだぎりしょう）　三曹。タガログ語使い。コードネーム：ベビーフェイス。

阿比留憲（あびるあきら）　三曹。対馬出身。コードネーム：ダック。

赤羽拓真（あかばねたくま）　三曹。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

甘利宏（あまりひろし）　一曹。元は海自のメディック。

《水陸機動団》
司馬光　一佐。水陸機動団教官。

●航空自衛隊
《総隊司令部》
新庄藍　一尉。父親は防府の鬼教官だった。ＴＡＣネーム：ウィッチ。

●防衛省
《陸幕防衛部》
牛嶋保夫　陸上幕僚長。陸将。

●外務省
片倉宗一郎　外務審議官。サイレント・コアの内部事情にも明るい。
〈日本台湾交流協会〉
和泉史朗　台北事務所所長。事務所のナンバー３で、大使相当。外務省チャイナ・スクールの一人。
依田悟　台北事務所参与。民間人。
藤原誉　台北事務所一等書記官。

●内閣
阿相士郎　総理大臣。

●警察庁
柊木尚人　警視長。関東管区警察局・サイバー局参与。

●警視庁
灰谷昭雄　元警部。警視庁公安部退職後任用。

●国際連合
西園寺照實　国連職員。国連軍縮局高官。

●その他
井藤浩　陸自元一佐。工学博士。陸上自衛隊初のサイバー戦部隊を立ち上げた後、民間に転じた。政府のセキュリティ・クリアランスを持つ。
小町南　女子大生。コンビニのアルバイト。
安功児　小町と同じコンビニのアルバイト。

依田健祐　依田悟の息子。私立中学校の生徒。

アメリカ

●海兵隊

エドゥイン・カーライル　中佐。ハワイの第１連隊沿岸戦闘チームのミサイル小隊を率いる。

●空軍

エルシー・チャン　少佐。中国系。

中国

●陸軍

孔雪麗　中尉。情報部所属。中国の少数民族の一つである京族。

顔誠　軍曹（中士）。孔雪麗の部隊ナンバー２。

●海軍

〈〝蛟竜突撃隊〟〉

宋勤　中佐。元北京大学日本研究センター研究員。

《東海艦隊》075 型強襲揚陸艦二番艦〝華山〟（40000 トン）

唐東明　大将（上将）。東海艦隊司令官。

馬慶林　大佐。東海艦隊参謀。

・ＫＪ－600（空警－600）

浩菲　中佐。空警－600 のシステムを開発。電子工学の博士号を持つエンジニア。

《第 164 海軍陸戦兵旅団》

姚彦　少将。第 164 海軍陸戦兵旅団を率いる。

万仰東　大佐。旅団参謀長。

雷炎　大佐。旅団作戦参謀。天才軍略家の異名を持つ。

戴一智　中佐。旅団情報参謀。

程帥　中尉。技術将校兼雷炎大佐副官。

台湾

●陸軍

李冠生　大佐。元烈嶼守備大隊指揮官。

●海兵隊

《第99旅団》別名〝鐵軍部隊(アイアン・フォース)〟

陳智偉(チェンヂーウェイ)　大佐。一個大隊を指揮する。

黄俊男(ホァンジュンナン)　中佐。作戦参謀、大隊副隊長。フロッグマン部隊出身。

呉金福(ウージンフー)　少佐。情報参謀。

陳正龍(チェンジェンロン)　少佐。エドゥイン・カーライルとは旧知。

王一傑(ワンイージェ)　少尉。台湾大学卒のエリート。予備役将校訓練課程出身。

劉金龍(リウジンロン)　曹長（上士）。コードネーム：ドラゴン。

楊志明(ヤンヂーミン)　上等兵。コードネーム：アーティスト。

●空軍

李彦(リーイェン)　空軍少将。第5戦術戦闘航空団を指揮する。

劉建宏(リウジェンホン)　空軍中佐。第17飛行中隊を率いる。編隊長機。

●国防省

谷進強(クージンチャン)　国防大臣。前国家安全局長。異名は〝氷の男(アイスマン)〟、〝岩の男(ザ・ロック)〟。

●その他

王志豪(ワンヂーハオ)　退役海軍中将。海兵隊元司令官。

王文雄(ワンウェンション)　台日親善協会と国民党の対外宣伝部次長。王志豪とは遠縁。京都大学法学部、大学院を出ている。

賴筱喬(ライシャオチャオ)　戦死した賴龍雲(ライロンユン)陸軍中将の一人娘。台北の飲茶屋の店主。

台湾侵攻２　着上陸侵攻

プロローグ

台湾の事実上の首都である台北（タイペイ）市は、台湾の北部にある。北端と言っても言いすぎではない。ここから北には、陽明山（ヤンミンシャン）という国立公園があるだけだ。台北中心部からほんの一〇キロ。バスで一時間も掛からない。

陽明山は、日本統治時代に国立公園に指定され、日本人は「台湾の箱根」と呼んでその山を愛した。単独峰ではないが、高度ほんの一千メートルの山々には、バリエーションに富んだハイキング・ルートが整備され、温泉もあり、今も台湾国民に愛されている。

そしてその山を北側へ越えると、もう大陸と台北を隔てるものは海しかなくなる。

台北防衛の最前線であり、危険な場所であるが、台湾軍は、いざという時でも、人民解放軍の陽明山への着上陸侵攻を想定したことはほとんど無かった。

海岸線は大部隊の上陸に全く適さず、上陸してすぐ山がちな地形になり、したがって道は細く、戦車で前進するにも全く適さない。

ここは、上陸不適な場所であると考えられた。台北市は、大陸に近いながらも、そうした地形上の天然の要害に守られていると言えた。

解放軍は、数時間前、台北市南の桃園（タオユエン）の沿岸

部に大部隊の上陸を試みた。上陸作戦は、何の抵抗もなく敢行され、一瞬成功したかに見えた。

だが、台湾軍は、解放軍が上陸し、海岸線に砲弾やミサイルを積み上げるのを待ち、山岳部から野砲で一斉攻撃を仕掛けた。作戦名はニイタカヤマノボレ――。

二万の将兵が、海岸線で焼かれ、八つ裂きにされ、砲撃の露と消えた。解放軍の上陸作戦は、完敗という形でそこで潰えたかに見えた。

だが、伏兵が背後に潜んでいたのだ。三波に及ぶ上陸作戦の背後の部隊は、桃園の手前でくるりと転進し、北へと向かい、陽明山沖に姿を現した。

青天の霹靂、完全な奇襲攻撃だった。しかも、広範囲な電波妨害と、ハイブリッド戦争による停電や携帯、電話網のダウンを仕掛けられていた前線の台湾軍部隊は、ほんの一〇キロも離れていない国防部本部に、その情報を伝える術もなかった。

しかし幸い、陽明山を守っていたのは、二週間前、東沙島守備隊として解放軍の奇襲攻撃を受けた台湾軍海兵隊《第99旅団》、「鐵軍部隊」の愛称をもつ精鋭部隊だった。

彼らは、闇夜に東沙島から潜水艦で脱出し、一部は、魚釣島にも上陸して戦った。だが、東沙島で生き残った部隊のほとんどは、そのまま台湾島本島で、来たるべき解放軍の上陸に備えて配置に就いていた。

だが、何しろ、東沙島の激戦で兵を減らし、かつ部隊としても疲弊していた彼らは、桃園などの最前線には配置されず、重要拠点ではあるが、まず敵が上陸してくる可能性が低い、ここ陽明山へと配属された。陣地構築はしたものの、事実上の休養だった。

そして今、その陽明山へと向かっているのは、東沙島へと上陸してきた人民解放軍・第164海軍陸

戦兵旅団だった。
　海兵隊守備隊を率いる陳智偉（チェンチーウェイ）大佐は、クアッド型ドローンを上げて稜線の向こうを覗いていた。
　エア・クッション艇四隻が向かってくる。その前方に向け、ミサイルを阻止するための煙幕弾が洋上の艦隊から陸地へと撃ち込まれていた。
　海岸線からは、味方のレッド・フレアが散発的に上がっている。
「海岸線にいるのは何処の部隊だ？」
「郷土防衛隊ですね。部隊というよりご近所さんの集まりです。全員がたぶん四〇歳代で、銃も錆び付いたM-16ばかり。とても戦力とは呼べない」
　作戦参謀の黄俊（ホアンジュンナン）男中佐が大佐の背後からモニターを覗き込みながら応じた。
「衛星携帯も駄目なんだな？」
　と大佐が情報参謀の呉金福（ウージンフー）少佐に質した。
「はい。輻輳（ふくそう）が起こっています。話し中ばかりで全く繋がりません。電波妨害も、さっきより強まっており、全く……」
「国防部は目と鼻の先なのに、この重大事を伝える術もないのか……」
　やむなく、ハンヴィーに乗せた兵士を台北へと走らせていた。そのハンヴィーが、国防部の正門に辿り着くまで、情報を伝える術はないのがいかにも歯がゆかった。味方砲兵部隊は、全て南を向いている。支援砲撃を要請したところで、砲兵隊の援護が得られる見込みも無いが……。
「さて、どうしたものかな……。援軍が来るまでどのくらい掛かると思う？」
「敵の戦闘機や攻撃ヘリが飛んでこないとしてですが、最短で六時間くらいでしょうか」
　と作戦参謀が答える。
「今の解放軍の勢いだと抜かれるぞ。こっちは、

二個中隊まで減った大隊を、予備役をかき集めて立て直し中だ」

「上陸してくるのが姚彦（ヤオイエン）少将の部隊なら、事情は向こうも似たり寄ったりでしょう。あちらも大隊規模を一個中隊まで減らされた。条件はイーブン。贅沢は言えません」

突然、指揮所の南側から爆発音が響いてくる。ドローンの向きを変えると、山を下る途中で、車が炎上していた。台北へと向かわせたハンヴィーだった。対戦車ミサイルを喰らって炎上した様子だった。

「くそ……。敵のドローンが見えないじゃないか……。イスラエルのドローン・ドームを買ったんだよな？」

対戦車ミサイルを装備した解放軍の中型ドローンが飛び回っているのは明らかだ。たぶん高度三〇〇〇メートル前後からこちらを見下ろしているはずだが、夕暮れにもかかわらず、まったく太陽光を反射せず、居場所はわからなかった。見えたところで、撃墜は難しかったが。

「あれはほとんど台北防衛用として配置されているはずです」

「どうすれば良い。いくら下りだからって、ここから兵隊を走らせていては、二時間は掛かるぞ……。山頂でレッド・フレアを上げたら台北から見えると思うか？」

「誰かが気付くかも知れませんが、意図までは伝わらんでしょう。陸軍がスキャン・イーグルの類いを上げているかも知れませんが、たぶんこっち側は見ていない」

「そうだ！　下のレストハウスに、レンタサイクルが置いてあったよな。確か、部隊間の連絡用に全部借り上げたはずだ」

「ありましたね。ここから一キロほど下った辺り

かと思いますが」
「情報参謀、すまんが、君が行ってくれ」
「自分が……、でありますか？」
「そうだ。事がことだからな。それなりの将校が行かなきゃ、国防部まで辿り着いても、誰も取り合ってくれんぞ。自転車に対戦車ミサイルを撃ち込むほど敵も暇じゃないだろう。二名を同行させ、下に降りて、バイクや自家用車でも見つかったら、徴発して構わない。装備は捨ててひたすら走れ！」
「はい！――」
「われわれは、残弾を気にせず撃ちまくって、時間を稼ぐ。だから援軍を至急遣せと」
「了解です。しかるべき上官に報告後、速やかに帰隊します！」
「ああ。だが、弾くらい持ってきてくれると助かる」

呉金福少佐は、通信兵二名を指名すると、その場にヘルメットやタクティカル・ベスト、プレート・キャリアを脱ぎ捨て、腰のピストルまで捨てさせた。そしてハイドレーション・パックの水をひと飲みしてから走り出した。
「どのくらい掛かると思う？」
「市内までは一時間掛からないでしょう。でも、たぶん国防部は、桃園の上陸部隊を殲滅させたことで今、有頂天になっているはずです。新手の敵がすぐ目の前に現れたなんて話を真に受けてくれるかどうか……」
「ぞっとしないか？　敵だってその気になれば、ほんの二時間で台北市内に侵攻できるということだぞ。一度市内に入られたらお終いだ。住民を巻き込んでの市街戦なんて出来ないだろうに」
「われわれは東沙島での苦境も耐え抜いた。今度も何とかなりますよ。一週間前、配属された連中

は、われわれが激戦の地で生き残ったことに信頼と尊敬を寄せています。全員で踏み留まって戦いましょう」

ドローンの映像に視線を移すと、敵のエア・クッション艇が、煙幕の中に突っ込んで姿が見えなくなった。対戦車ミサイルでもあれば一、二隻は葬れただろうが、上陸は全く想定してなかった。ほとんど全ての味方部隊が、海岸ではなく、海岸線を見下ろせる位置に陣取っていた。

完全に出し抜かれた。海岸線ではなく、山中で敵と撃ち合う羽目になる。そういう時は、だいたい勢いがある方が勝つのだ。今、その勢いは明らかに敵側にあった。

人民解放軍による東沙島奇襲上陸作戦から二週間が経過しようとしていた。解放軍は、東沙島に続いて尖閣諸島魚釣島へと上陸してきた。

自衛隊は、これを寡兵で迎え撃ち、最後は水機団七〇名の犠牲を払って撃退した。ただし、政府は事態の収拾に失敗したことの責任を取る形で総辞職、新しい政権が誕生し、同時に防衛出動命令が発令された。

だが、中国は、矢継ぎ早に手を打ってきた。ハイブリッド戦争を仕掛け、海底ケーブルの引き揚げ基地や変電所を爆破し、発電所を始めとして放送施設へのサイバーアタックで、それらをダウンさせていた。もちろんインターネットも使えない。メール一本やりとり出来ないのだ。

日本も台湾も、すでに三日間停電している。東京では都市ガスも止まっていた。放送されている電波はなく、衛星テレビからラジオまで止まっていた。

東京の住民が何かの情報を知る手立ては、コンビニに貼り出される瓦版のみだった。

その状況は、ここ台北でもたいして変わらなかった。

第一章　邦人退避

日本台湾交流協会台北事務所所長（大使相当）の和泉史朗は、台北事務所が入るビルの隣にある慶城公園の並木道にいた。台北を脱出する最後の便となる観光バス六台が止まっていた。

日没はあっという間だった。辺りに灯りはなく、見事なまでの暗闇だ。ビルはもとより信号機の灯りすら無い。もちろん人通りも無い。

彼らを先導するパトカーが一台前方に止まっていたが、一向に出発しないせいで、今はエンジンを止めていた。気の毒に、彼らがここに戻れるだけの燃料があれば良いがと、和泉は思った。

バスの運転手には、それなりのボーナスを払ってある。警官にも謝礼を出さねばなるまい。

バスの乗客からも、時々、出発を催促する声が上がっていた。

和泉は、一、二分置きに腕時計を見るようになった。この暗闇のせいで、確か五万ドルはしたはずの高級腕時計の盤面は真っ暗だった。いつの間にか盤面ライトが壊れていた。いちいちマグライトを点さなければ針も読めない。

「もう良いでしょう、大使。出発して下さい」

暗がりの中で、日台交流協会の参与でもある依田悟が言った。

「いやぁ、もう一〇分くらい待ちましょう」

「いえ。この時間になっても姿を見せないということは、脱出する意志はないということです。二週間掛けて、十分、考える時間は与えました。いざという時にどう行動すべきかも詳しく話し合いました。昔ならもう元服も終えている頃です。心配しても始まらない」

「どこかで事故に遭っているのかも知れない」

「言葉が不自由なわけでもないし、ここ台北が空襲されているわけでもない。女の子なら心配もしますが。生き残る知恵は授けたつもりです」

「わかりました。依田さんがそう仰るなら。バスに乗って下さい」

「いえ。自分はまだ仕事がありますので、大使こそ、ここに留まる必要はもうないでしょう？」

「自分がここを離れる時は、最後の日本人としてです。この状況下でもまだ数十名の日本人が留まると言っている。彼らの避難先も確保しておかねばならない。外交官の本懐という所ですな」

依田は、マグライトを点すと、いったんバスに乗り込み、妻と娘に別れを告げた。特に心配はしていなかった。妻とも何度も話し合った。

ここ台北が戦場になることはない。そういう状況下では、総統府は白旗を揚げて街を解放軍に明け渡すだろうと思っていた。だが、人前では滅多にできない話だった。

娘は泣いていたが、気付かないふりをしてバスを降りた。

和泉は、先頭のバスへと向かい、部隊の指揮を執る藤原誉（ふじわらほまれ）一等書記官をいったんバスから降ろした。藤原も、身分としては外務省からの出向扱いで、書記官呼称は、あくまでも便宜上だった。

「出発してくれ。もう誰も来ない」

「よろしいのですか？　自分が残るのが本分だと思いますが」

「まあ、何かあったら、最後のご奉公という奴だ」
「フェリーはちゃんと来てくれますかね」
「総統府は、もし迎えの船が来なければ、漁船をかき集めてでも脱出させると言っている。中東やアフリカのどこかで、滑走路を探し回って彷徨(うろつ)くよりは遥かに楽な任務だ。襲ってくるゲリラもいない。君は、本国に避難民を届けるまでが任務だからな。港から引き返すなんて馬鹿なことをするんじゃないぞ」
「大使も気をつけて下さい。台湾人の圧倒的多数が、いざとなったら自衛隊が助けに来てくれると信じている。それが来ないとなったら、事務所は暴徒に包囲されますよ」
「そうなる前に、和平交渉が纏まることを願いたいね」
　パトカーに乗る制服警官が出発を催促してきた。バスのエンジンが掛かり、ヘッドランプが点る。
「行ってくれ！――」
　和泉と依田は、並んでバスの出発を見送った。パトカーは、住民の注意を引かぬよう、パトランプは消したまま先導して走った。
　正確な数は誰にもわからないが、およそ三〇〇万人の台北市民も恐らく半数程度は、どこかに避難したはずだった。
「台湾積体電路製造(TSMC)の半導体が無くなったらどうなると思います？」
「私がこんなことを言うのも何ですが、世界経済は三年から五年は停滞し、混乱するでしょうが、中国は、まさか自国で生産する半導体を世界に売らないとは言わないだろうし、韓国も量産している。さすがに五年もあれば、日本でも生産工場が立ち上がるでしょう。人類は道を探りますよ。そして、台湾の技術が世界経済を支えていた事実も歴史の一部になるだけです」

「貴方は台北に家まで買ったのに、仕事はどうするんですか？」
「台湾人と同じことをするでしょうね。不本意だが、中国製の半導体の仲買をするだけです。半導体が赤く塗ってあったからと、性能は変わらない」
依田は、元は日本企業の半導体エンジニアだった。だが日本製半導体が落日を迎えた頃、ヘッドハンティングに応じ、勃興する台湾企業へと転じ、技術者は辞めて営業マンとして頭角を現した。今は、日本のユーザーと台湾のベンダーを結ぶ必要不可欠な人材として活躍していた。
「では、私は事務所に戻ります」
「私は、息子が帰っているかもしれないので、いったんマンションに帰ります。明るくなっても戻らないようなら、一度中学校に顔を出してみます」
「気をつけて下さい。昨夜は、あちこちで夜盗が出たという噂です。一応、建前としては、あれが最後の便だが、次の避難計画も立てますから」
「よろしくお願いします」
和泉が暗がりに消えて行くと、依田はマグライトを点した。だがハンカチでＬＥＤを覆い、地面を照らす光量を落として歩き出した。ここまで自家用車で家族を送ってくれた台湾人の部下がいたが、暗くなる前に帰した。道は知っているし、スマホは通じないが、ＧＰＳは拾えるから、地図案内も出来る。どうにか自宅まで辿り着けるだろうと思った。問題は息子だった……。
息子は、学校の友だちに別れを告げてくると出て行ったが、そうではないことは自分もわかっていたはずだ。止めるべきだったが、自分はそうしなかった。その判断を後悔せずに済むことだけを祈った。

陸上自衛隊第一空挺団・第四〇三本部管理中隊、その実、特殊作戦群の特殊部隊《サイレント・コア》は、沖縄は牧港補給地区（キャンプ・キンサー）の第4ゲートを入ってすぐ右手のテニスコート上にテントを張っていた。

前夜は、那覇駐屯地や隣の那覇空港に中国の弾道弾攻撃を喰らい、その復旧に駆り出されたが、今日の日中は、比較的暇だった。というかここは平和だった。

海兵隊は、この巨大な補給基地からさっさと必要な物資を運び出した後のようで、別に忙しい動きがあるわけでもない。というより、そもそもこの基地に物資など保管していたのか？　という静けさが続いていた。戦車はもとより、大量のヘリコプターまで格納してあるという噂だったが。

だが海兵隊は、エアコン付きのエアドームテントやテーブル一式を貸し出してくれた。部隊を率いる土門康平（どもんこうへい）陸将補に不満はなかった。ねぐら用のカンバスベッドも提供してくれた。

「それで、艦隊は沖合に留まったままなのか？」

と土門は、部隊のITシステムを預かるガルこと待田晴郎（まちだはるお）一曹に質した。

「グローバルホークの写真ではそのようですね。空自のあれは海上監視用ではありませんが、さすがに船があそこまで巨大だとレーダーに映る。揚陸艦部隊は、陽明山沖に留まったままです。山陰が邪魔になって、グローバルホークからは上陸地点の観察は出来ないようですが」

「陽明山に上陸したのか？　あり得ないだろう。戦車を揚げるビーチもなければ、戦車が走れるような太い道もたいしてない。たちまち隘路にはまって肉弾攻撃を喰らうだけだぞ」

「歩兵だけなら走れますよね。装備を背負っても、台北までほんの四、五時間でしょう。鉄砲だけなら、その半分の時間で」
「それは、台湾軍の抵抗がなければの話だろう。戦車がほんの一両でも潜んでいたら、一時間は足止めを喰らう。足止めされた所に迫撃砲を喰らって、至る所で部隊が全滅を繰り返す羽目になる。サプライズ効果は狙えるだろうが、ただの奇策だな。主攻部隊が全滅した後とあっては、それもありだろうが。どっちにしても、第一波は酷い失敗だったな。台湾軍の飛行場を潰してはみたものの、戦闘機や武装ヘリが自由に飛び回れる状況でもないし。空挺もヘリボーンも出来ない」
「隊長ならどうします？」
「俺は、空挺とヘリボーンだな。残った戦闘機の全てをぶち込み、ほんの三〇分間だけ、台北周辺の制空権を確保する。その三〇分で、空挺とヘリボーンで歩兵を台北へと突っ込ませる。できれば一万名は欲しいな。派手な市街戦を繰り広げ、総統府を占拠して、台湾島奪還宣言をやる。総統府がどこへ避難しようが、台北でそれをやらかせば、台湾民衆の士気はそれなりに喪失するだろう。国民の士気が低下すれば、総統府も後ろ盾を失ったと判断し、白旗を掲げるかも知れん。海岸線で愚かな上陸作戦を展開して二万も失うよりはましだ」
　一個小隊を預かる原田拓海（はらだたくみ）一尉が完全武装で現れた。
「原田一尉、出撃準備を終え、出頭しました」
「ご苦労！　間もなくCHが一機降りてくる。求人広告風に言えばだな、簡単なお仕事です――。フェリー〝よなくに〟（七〇〇トン）にファストロープで降り立ち、宜蘭（イーラン）県の烏石（フーシン）港まで向かえ。そこで、台北から避難してくる最後の邦人を出迎

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。